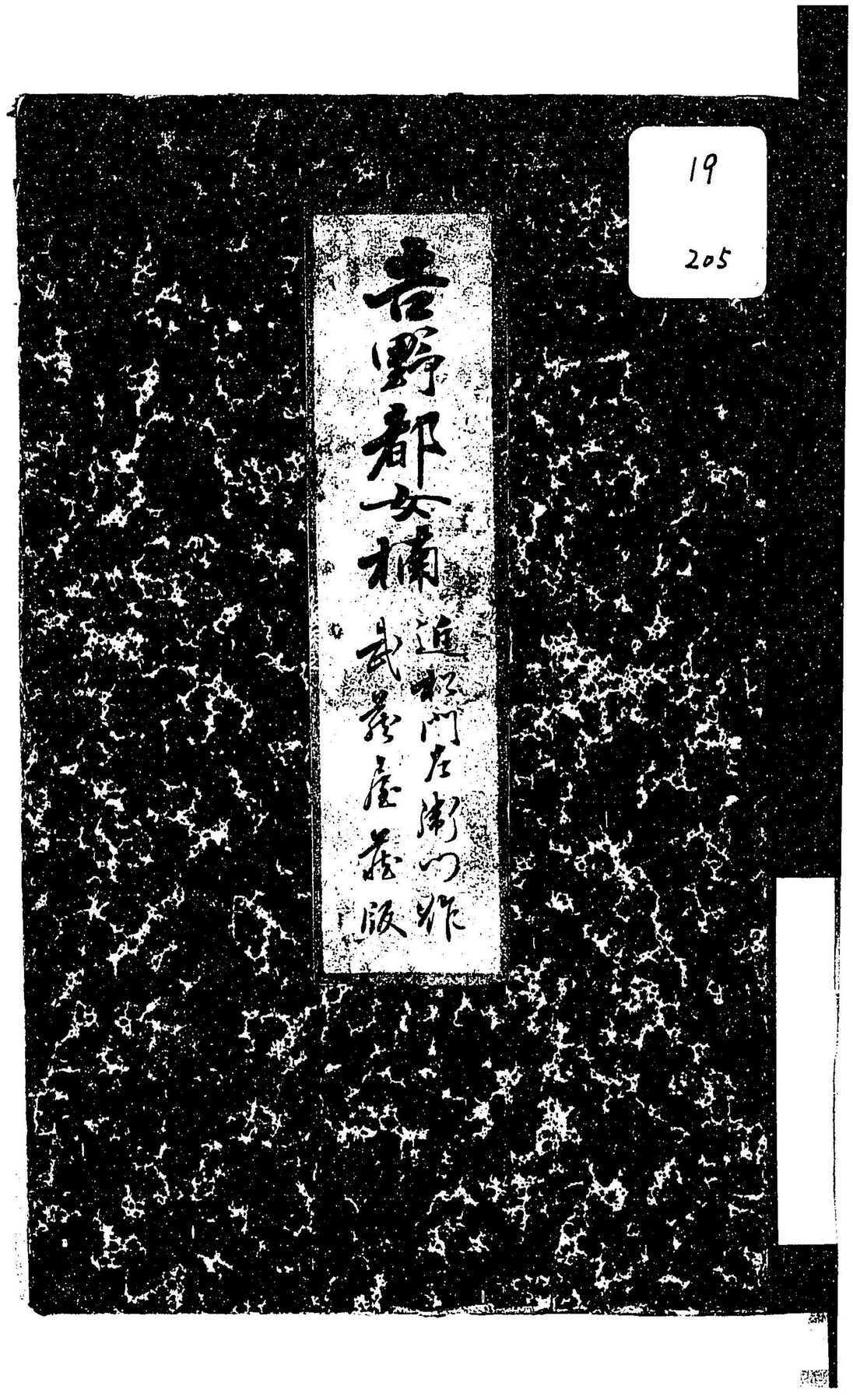


088373-000-4

19-205

吉野都女楠

近松　門左衛門／著

M23

DBI-0218

19-205 No.5391/2

帝國圖書館藏

近松門左衛門翁作

吉野都女楠

完

東都武藏屋版

日本人批評第三十九號
廿三年一月十八日發兌

英のシエークスピアーは、各國共に尊んで古今絶無の詞宗となす、是れ何の爲め乎、蓋し其意匠の緻密迫神にして、語辭の穿眞なるが爲めのみ、其「シーザー」「マクベス」「ナセロ」等を讀めば、眞に數百年前、數百千里外の人に逢ひたる感を起すなり、是れ卽ちシエークスピアーの古今に無比なる所以なれども、退きて考ふるに、未たシ氏の著を繙のざるに、余輩の多くは既に腦裏に其巧妙を描くなり、何となればシ氏は各國一般に賞揚する所なればなり、而して西洋拜崇の熱度高まる丈け益々其巧妙を感ずるなり、所謂買被りと爲し居る者も之なしとは保し難からん、我近松氏が著の如きも之を熟讀翫味する時は、其意匠の幽邃巧妙なること、實にシ氏の「シーザー」「マクベス」等に劣らざるものあり、只社會の程度風俗の差違よりして、彼の著は王侯貴人百代の後に之を愛誦し、此れが著は空しく東洋孤嶋中の一部分の人に知らるゝのみ、而して其中にも既に湮滅に歸せんとするものあり、豈に惜むべきの至りならずや、早矢仕氏之を憂ひ逐次飜刻して、之を後世に傳へんことを計る美舉と云ふべし、此頃は西洋の小說とさへあれば意匠も組織も淡純無味なる者と、尙は且つ餓虎の肥兎を爭ふ如くに賞讀して、却て己れが國人中既に之れに幾等超ふるの著あると知らざるとは、人心程奇妙なるものはなしと言ふべし

吉野都女楠

近松門左衛門作

[illegible]と尋て來れる權聖者の未來記見つんべし。東魚來つて四海を呑み西鳥來つて東魚をくらひ。海內既に一[illegible]に歸し二度九五の御位。後醍醐の帝と重祚ある。逆臣相摸入道が一族亡びて後。足利治部大輔尊氏。聊朝家を怨み奉り。東國勢を引率し矢矧驚坂竹の下。數度の軍に勝誇り己れ征夷將軍にとしあつて。帝都をおこのく責入しと新田左中將義貞。楠判官正成。陳平張良が肺肝より出たるごとき。名大將。命を風前の塵にのけ義を金鉄より堅くして。驅破し驅惱なし千變万化の合戰に。さしもの尊氏終に打負筑紫と差て落じはの。八重九重や都の內万歲ところ唱へけれ。時に建武三年五月十五日。新田義貞早馬を立て奏聞ある。抑朝敵尊氏大友少貳と順へ。九州の軍兵五十万騎。兵船數千艘にて責登り尊氏が弟直義。山陰山陽の大勢陸路とうつて雲霞のごとく。播州の赤松敵に組し苔縄の城に立籠り。官軍を遮りしと義貞備後備中にさゝへ。挑み戰ひし間に。敵船はや須磨明

石とはせ越ゆと退々注進頻なり。天皇大きに驚のせ給ひ。楠判官正成と頓て御前に召れける。扨義貞が注進事急なり。罷向つて合戰と致すべしとの勅諚。楠畏つて奏せしは。數年の軍に疲れたる御方の小勢。筑紫方は新手の大勢機に乘たるに驅合せ。常の如くの合戰は御方打負申さんと決定。先新田殿とも召このへされ君は比叡山へ臨幸なり。正成も河内に退ぞき敵と都へおびき入。河じりとさし塞ぎ籠の鳥の如くにして。兵粮と留敵軍次第に疲れ落ん。所と新田殿は山門より押寄。正成は搦手より責登り眞中につゝんで。一蒸むす程ならば朝敵一戰に亡びんと。正成が方寸の内に覺へゆ。軍は必一たんの勝負と見るとなのれ。始終の勝ころ肝要にてゆへ。たとへ官軍百度戰ひ百たび負る共。正成一人生て有と聞召ば。聖運終にひらこのるべしと。思召れゆへと世に賴もしくぞ奏しける。坊門の宰相清忠御簾の前につゝと出。ヤア應したるこの楠。尊氏が多勢に聞おぢして。一戰にも及ず河内へ退ぞき。君と比叡山へ臨幸なし奉れとは。命の惜さに帝位と輕しめ申よな。惣じて新田義貞勾當の內侍に思ひと殘し。都に心引るゝもあ軍手ぬるく敵にきはひ付たるに。御邊も河内へ引んとは故郷の妻子がもうしいの。伊豫の國の住人大森彦七盛長と云武士。尊氏に組するといへ共其に縁有故。裏切して味方に力と加へんとの內通あれば。味方の勝利目前にて御邊らが命に。氣遣のないとは此宰相が請合。はや〳〵發向有べしと嘲り顏して申さるゝ。楠もとより私の怒りに忠と忘れぬ眞勇。彌おもてと柔げ。仰にては候へ共其大森彦七が內通にて。味方勝に極らば猶以正成向ふ迄も候はず。去ながら詩歌管弦は殿上の御もて遊び。弓馬合戰の道は武門の諫言に任せられ。是非に都と明渡し敵に一たん勝と與へ重て。畢竟の勝と御覽あるこそ。謀と帷幄の內に旋らし勝事と千里の外に顯はす。籌策にてゆゑと子房が秘藏孔明が骨髓。殘るのたなく奏せらる宰相大きに色と損じ。御邊が云迄もなく弓馬合戰の道なればこそ。賤しき汝等禁庭へ召るゝ條有がたしとは存せずや。先年御邊千早赤坂の城郭にて。六波羅の大勢と傾け相模入道亡しも。全く武略の手柄ゆゑ君の聖運天に叶ひ宗廟社稷の大小の神祇王法と守護し給ふ故。殊に今度は目に見へたる勝軍。大森が御蔭にて手柄すべきは此度はやうつ立と有ければ。軍法不覺の卿相雲客口々に。敵の內通有のちは天の與此時。是非〳〵楠はせ向ひ朝敵尊氏一戰に責亡ぼし。震襟と休め奉れと。衆議一決の勅諚はうたてかりける御運なり。正成も此上はさのみ申に及ずと。御前と

立けるが是ぞ最期の合戰と。思入定し忠臣の屍は刃にきられ其。義は碎されぬ楠と朽せぬ。名をこそ留めけれ。元來正成智仁勇と兼備し。死と善道に守る良將。今度の合戰味方必定負軍。討死の時極れりと本國へも立歸らず。直に五月十六日有あふ手勢五百余騎。嫡子帶刀正行十一歳。父が馬に押並べて打ければ。舍弟正季一族和田の新發意源秀。同新兵衛尉紀六左衛門恩地の左近馬物の具と輝、のし心の花も咲のくる。櫻井の宿に着けるがまだ雲こりて五月雨の。やゝ夕立と降雨は滝の落るが如くにて。人馬の足と立のね。生田の森に打入て暫く晴間と待居たり。雨に涙よるこやの池堤と急ぐ簑笠は。早苗の賤のと見すつれば下部二人に長持のゝせ。四十余りの女房の雨にあらそふ涙の雫。しほれまろびて走りくる下部共長持どつのとおろし。ヱ、ぶう因果の夕立や目も鼻もあのれぬ。いざこいあの森で少晴して行まいの。コレそこな女子殿。長持預けた番めされと二人は森へぞ走りける。女とのふにのきくれて炊き沈みて立けるが。思ひより有顔付にて長持の棒取て捨。石と拾ひてちやう〳〵〳〵。敲く手先に力なき女力も念力の。天や見透す鍵の穴錠前はなれ落ければ。なふ有がたや。ヤア出と蓋と取手にすがり付。廿計の上瞞の涙ひまなく息籠り。顔にばら付亂れ髪。柳櫻をこきまぜて氷ふうこのめし如くなり。卒下部共のこぬさきにと抱出せば、嬉しや。此池こそみづのうちに菩提と進る功德池よ。ろなたも數珠と持てのふ肌に御はぞんのけてのゞはぞんのけたる時鳥。あやめの沼は水淺しと深みと尋さまよひたる。正成馬上より遙に見付あれ〳〵。身と投る女有激の味方か何れにもせよ。源秀のけ付助けられよと有ければ。承ると和田新發意あせと傳ふて走りよる。其丈六尺七寸古の辨慶もあざむく斗鬼の樣成赤入道。二人はあはやと手と合せ。飛入所と引寄てしつのと抱く。なふそふせいでも死る身とせめて身躰に疵付ず。死せてたべと飛入と是上臈。殺す程なら何のとめふ。あれ成は楠判官正成物の憐れと見捨ぬ氣質。子細とつくと聞屈よとの使なりと云ければ。扨は楠殿とやみづのうちこそ。新田義貞の妻勾當の内侍なり。ふ情に新田殿の陣屋へ送りたべのしと。の給ふ所へ二人の下部立歸り。ヤア長持の錠捻切た。已れ取逃し手ぶりで歸つてこちとが命有物の。こつちへうせふと取付所と源秀二人が首筋ひつ掴み。手ぶりて歸れば取るゝ命愛にて取てくれんずと。蘆間にのつぱと打こめば。五躰と纏ひ菱のづら泥にゑふてぞ失にけり。其隙に楠親子馬乘はなし。とのふいたはり給ひければ内侍

も涙にくれながら。常々夫の物語り補判官正成は。慈悲第一の大將と聞、しにのはちぬ御情何と報じ參らせん。一とせ猿樂見物の時。伊豫の國の住人大森彦七盛長とやらん。みづからに心とうけ坊門の宰相と中立にて。威勢でとゞし文でぬらし。色このへ品のへ口説しとつれなく。返事もいたさぬ間に新田義貞の妻と成たるは。上樣よりの勅諚天下晴ての夫婦ぞや。其に此度義貞殿西國發向の留守と覗ひ。宰相理不盡に亂れ入先約は大森。仲人の宰相義理が立ぬの何のとて。無理無体に長持に押入て送らるゝ。なふやるのたなさ便なさ乳母が慕ひくるとは知ず。頭もあがらず息もならぬ長持と。搖るやら振るやら打付まはる其體胸にてたへ。目もくら〳〵と幾度の死入し。火の車にのせて行く地獄の迎ひものくやらん。此上のわれ情に我夫の陳屋迄。送り屆けて給はれとめのと諸共手と合せ。のきくどきて泣給ふ。正成打うなづきさとそ〳〵。我大内と出しよりの樣のとのあらんとは。宰相が詞の色にて察せしなり。義貞の御陳所へ送り申はやすけれ共。宰相のくと洩聞ば。陳場に女中と召れしと惡樣に奏聞し、教唆と以御夫婦の中とさのば御耻辱と招くに似たり。それ〳〵源秀是より都へ御供し。玄惠法印ゐ預け參らせよ。道中人に悟られぬ用心第一。とく〳〵と有ければ合點〳〵智略はお家。獄學院の雀任せてとけと小躍して。良等二人が具足とぬがせ長持に入捧差通しになはせて。是内侍樣もめのとゞも慮外ながら下女にして。我等は又此躰と内侍のうちこのけ鎧の上に衣のづき。二王の樣なる大入道五日歸りの花嫁と。しやなら〳〵とふりのけてサア腰元衆。早ふゐじやゝと夕影も。眼は朝日てる月の都の方へと急ぎける。正成遙に見送つて。嫡子正行と招涙とうめ。汝幼く其能聞とけ。忝も我帝に賴まれ奉り。命と敵の矢先にのけ身と戰場になげうつと。譽と取て名と殘さん爲にもあらず。子孫の榮華と希にもあらず。朝敵と亡し國家安全の。叡慮とやすめ奉らんと義と重んずる斗なり。今度の合戰味方必定打まけ。王法忽傾き御代と奪はれ給はんと。鏡に照すがごとくなれば。我一つの謀と以てさま〳〵諫め申せ共。坊門の宰相よこしまの理と進め。君用ひさせ給はねば力なくうつ立たり。父が一期の名殘の軍花々敷戰ひ。一戰に腹と切べきぞふとは是より故郷に歸り。父が最期と聞ならば彌身と全ふして。甘にも余る時金剛山と要害として。住吉天王寺に打て出。近隣と劫し討手向はゞ一命と。養由が矢先にのけ義と紀信が忠烈にくらべせめ戰ひ。君と御代に立參らせ父が憤りと散せんと。いの

成佛事孝養も是にはなぞの勝るべき。今生にて汝が顔見るとも是迄ぞ。必詞と忘るゝなと勇氣たもずぬ弓取も。恩愛父子の浮世の別涙とはら〳〵とぞ流しける。正行聞もあへず口惜き父の仰やな。楠正成が嫡子正行こそ負軍と考。道より逃て歸りしと世の嘲りに落んと。こばねの上の恥辱候とに視の討死と。思ひ定し軍場と見捨る子や候べき。是非御供につれられずば我等一騎のけぬけ。敏達天皇の後胤。井手の左大臣橘の諸兄公の末葉楠河内の判官が嫡子帶刀正行。生年十一歳と名乘て能敵にのけ合せ。引組でさしちがへ冥途の道のさきがけと。思ひ詰たる正行敵の箭とも見ぬさきに。歸れとはうらめしや幼なくて戰場の。妨と成ならば只今茲にて腹切らん。介錯してたべ人々と芝の上にどうゑ居て。聲も惜まず泣ければ。有あふ軍兵感涙ホ鎧の袖とぞ絞りける。正成もともに涙は先立ぞも。わざと聲とあららげ。ヤナ弓馬の家に生れて討死するが珍しきこの。ふとと年月養育せしは。父が最期の供せよとては育てぬぞや。戰ふべき所に進み引べき所に退き。天下に功とたつるこそ能弓取とは名付たれ傳へ聞く西天に獅子といふ獸有。其獅子子と產で三日の內其子と。數千丈の巖壁より眞顚倒に投落す。獅子の氣分なき子は。岩角に身と破て當座に死す。いきはひそなはる獅子の子は中よりひらりと跳返り。身と全ふすと傳へたり。我子の心と見るとは畜類とても斯の如し。今諸國八方に峙たる敵の中。とさなき汝と歸すとの巖壁に投うつ獅子の子よりも猶あやうし。汝勇士の氣分備らば。數万の敵の餌先のがんせきも。しのぎて碎く獅子のいきはひ太平の御代と跳返せ。吉野初瀬の名木も老木は次第に枯れ共。こぼるゝ種の色香とつぎ花の名高き山ぞのし。二ばの苗と殘すこそいはゞとなられん楠が。永き世迄のおたみぞと。鎧の引合より一卷と取出し。是ぞ我秘する所の軍術。此書と讀て道と得ば。父正成がながらへ有も同前ならんと。一卷と手に渡しサア。此上にも聞分なく。腹切らばされ供せばせよ。父が云と是迄と馬引よせもらりと乘。思ひ切たる心にもゝ敷我子の武者振と。見るも限りと曰にもろき涙に手綱くりそへて。駒とひのふる斗なり。正行も理に當る親の教訓詮方も。涙とおさへ御詞一々承りぬと。一卷取てとし數きめのとの恩地に馬引せ。手綱のいくり打乘て親子此世のわのれの詞。さらばとだにもいはゞてこそ欲と忘れ情と知り。義にたくましき大將は百万騎にのこまれても。恥辱の死はせぬ物ぞ。此理に背く武士は。勝も誠の勝ならず恥と子孫に殘すなり。心得たるの正行承り

いと。互に駒と引のへし東西に別れしが。振返り〳〵親は我子の身の行衛。子は又親の最期の末思ひつゝみて弓取の。泣ぬと今の涙とは。よその袂にせきのくる湊河へぞ寄にける。明れば五月廿五日尊氏の軍兵海手山手百万余騎。猶とならし簾とたゝき鯨波とどつとぞ上たりける。楠手勢七百余騎同時に鯨波とつくり立。多勢が中にわつて入喚叫んで戰ひける味方は小勢と云ながら一命と義路にのけ。名と末代にとゞめんと思ひ切たる勇士共。北より南へ追なびけ西より東へわつて通り。息とも續せず責あくればさしもの大勢さゝへのね。須摩のうへ野へさつと引後陣の勢とぞ待居たる。大森彦七盛長駒のけすへ大音上。鬼神ならぬ楠某が一軍に。正成兄弟首取て敵味方の目と覺さん。彦七と手本にせよと廣言吐て打てのゝる。正成も駒のけよせ何大森とや。合ぬ敵不足ながら心ざしのやさしやと。まつしぐらに駈出す此いきほひに氣と失ひ。逃鞭打てひつのへすきたなしのへせと追のけしは。早瀬の鮎と鵜の鳥の追てまはるがごとくにて。程なく追つめ盛長が。上帶つのんでぐらぐ打付首とのゝんとせし所へ。藥師寺十郎同次郎ゆん手めてよりむずと組。しや物々しと兩手とのべ草摺つのんで捻あふまに。大森こわきとそつとぬけ跡とも見ずして逃失けり。こゝ大事の敵と洩せしもとのれら故と。兩脇にしつのと挾みゑいやうんとしめ付れば。目口より血と流し二人一所に伏たりける。是と見て吉良石堂高上杉六千余騎。楠と討留んと八方より喚てのゝる。正成元より討死と思ひ定し晴軍。望む所と太刀さしのざし。打て出れば正季正員和田五郎。宗徒の兵ぬきつれ〳〵死物狂ひのむがみ打。當る者と幸になぎ立〳〵追まはす。されど共敵は百万余騎人のへ〳〵責立れば。七十三騎に討なされ正成今は是迄と。一村在家に走り入是屈竟の最期場と。心靜に鎧ぬぎ捨いのにのたゞく抑最期の一念に由て善惡の生と引といへり。九のいの間に何が御邊の願ひ成と問ければ。弟の正季のら〳〵と笑ひ。只七生迄は同じ人間に生れ出。朝敵尊氏と亡ぼさんと我等が願ひの一つなりと。いはせも果ず正成嬉しげに打うなづき。罪業深き惡念なれ共我も斯樣に思ふなり。いざや同じく生をのへ此本懷と達せんと。いひもあへず押肌ぬぎ氷のやひば一もんじ。脊骨とのけて引まはせば。宗徒の一族十六人從ふ兵五十余人。我も〳〵とさしちがへ同じ枕に伏たりし。惜のりし惜むべし日本無雙の名將の最期の程ぞ潔よき。あひもすのさず大森彦七大勢引具し込入て。一々に首のき落し、目出度し心地よし。扳ぬ太刀の高名

楠が首尊氏公に奉らば。三の國は取た物日頃心と通はせし。勾當の內侍も坊門宰相が計ひにて今夜我手に入等むまいとのつゝみ取。早ふ內侍の顏が見たいと云所へ。女房二人先に立長持と舁入させ。宰相殿のお使と聞より彥七大きに悅び。ゝ、滿足〳〵八目と憚り。長持とは宰相殿の一策。去ながらいとしい君の箱入氣の詰るもいいとしい。先々御げんと蓋とあくれば耻のしげに。薄絹洙く顏のくし。籬の梅のはや咲の雪に埋れし風情なり。彥七猶も心うのれ其おぼこながなと味しそさまと。我手に入んため此度の軍も。某が手と碎き御覽へ楠一家と討留たり。是より義貞が首捻切ちんは寢鳥と指すよりいとやすし。世になき新田に心中と立んより。日の出の我等になびのれよ色ころ黑けれ心は伽羅。先我が陣屋へ同道して新枕の酒もりせん。いざさせ給へと肩にのけ二足三足は歩みしが。ゝ、不思議や今迄輕き上臈の。俄に重き小夜衣我妻ならぬ念力の。大磐石と肩先にたゝみのけたるごとくにて。五躰ちつ共働のず ャアヨしれものでざんなれと。太刀に手とのけ振あとのけば如何。和田の新發意源秀くはつと見開く眼の光り。二面の鏡研立て額に付たるごとくなり。大森わな〳〵震ひ出してはぐ〳〵下にそつとおろし。逃入んとする所と是々彥さん手がわるい。幾世心と盡すとは僞りの何處へいのんす。いとしのはいといはんした言の葉いうそのいな。ゞ、しんき跡じよりさんすは早や秋風のと。見あげ見おろす高入道。しやなら〳〵の八もんじは二王ともるがすごとくなり。彥七五躰縮め共弱味と見せじと大音上。ャアく源秀智仁勇と兼しと云。楠さへ討取たる盛長。いはれぬ腕立せんよりも腹ときれとぞ呼はりける。源秀今は堪られず長持の棒ふつとりのべ。ャィ禮義知ずの國賊。楠一族國の爲君の爲死と善道に守て。潔よく切腹せしと何ぞや已れが。討止しなんぞとは。どの頰げたのら吐出した。いざこい源秀が手なみと見せんと討てのゝる。盛長猶も口へらず。侍たる身が坊主と合手にする物のと言捨て逃て行。ャア出家侍 犬畜生余すまじと。ぱつ立〳〵たゝきた八方微塵に討立ればあたりに。近づく者もなく皆ちり〳〵に逃てけり。さもそうず〳〵これより河內に立越正成の最期と傳へ。重ねて義兵とあぐべしと甲斐なき首と取集め。怒れる眼にはら〳〵と涙貫くたまはこの。道は生田の森の露するのしづくや末の世に。譽と永く傳へける

將の謀洩る時は軍利なし。外内と窺ふ時は災ひ制せずとや。坊門宰相清忠が内通故。湊川の合戰破れ楠正成討死すといへ共。惣大將新田左中將義貞。西の宮に御陣と召れ士卒と懷け給ひければ。馳集つて御方の勢四万余騎とぞ聞へける。侍所長濱六郎左衛門松明持せ陣屋とめぐり。四人四五人搦めさせ義貞の御前にひつすへ。彼奴ばら今夜辺邊の田畠と荒し。御馬の飼料に殘せし青麥と。盜み刈取しと搦め取てい。見せしめの爲首切て。獄門にのけ候はんと言上す。義貞聞召。抑今度の合戰は朝敵と亡ぼし。民安全になすべしとの勅諚なれば。賣買耕作に妨げず。田畠の一粒とも刈取者は急度刑罰すべきよし。諸軍勢に相ふれ所々に立たる高札と背きしは。敵方のあふれ者の但盜賊の白狀させよと御諚有。雜兵縄付ひつ立。サア大將の御前成は眞直に申すべし。偽らば首捻切らんときめつくる。是々ろこつなされな我等も此國の大將。サア大將とは。いや〳〵巾着切の大將はさみの彌市と申者。或ひは花見の開帳の。又は傾國猿芝居人立多き所にて。人の懷腰のまはり手がさはるとこつちの物。資本いらずの商買此軍始つて。國中のよい衆はわらんぢがけで逃ごしらへ。遊山所はいのなと我等がしよぎいひつしやりほん。御發度と背きしはいつそてんぽの皮巾着。お根付衆に咎られくゝられましたと申ける。其次なる大男。已が面付たゞ者ならず。眞直に白狀せよ。のぢばらばしやつ面とはつて〳〵はりまはさん。こゝ余りはる〳〵御意なされな。はりが過て此ざま我等は博奕のぞう取。此頃つゞく不仕合鍋釜盤つりお前。糠味噌桶迄はたけ出し詮方盡て二三日麥とうるたのうたにはり。ひねつても〳〵二寸より上目なく。あげくに今夜三寸縄に縛れましたと泣にける。三番目は若き出家三衣に似合ぬ麥盜人。子細と申せと喚付る。されば愚僧はあのしがたゞ蓮臺寺と云淨土寺の後住に。無海と申法師成が學文のうきばらしに。風と室の津へ出のけ梅花のうつりとのぎろめて。抹香の香きづまりさあくびは百八煩惱菩提。いつそれ山に宗旨とのへ好色修行と心ざし。通人詰た其あげくが其はいのい赤柳檀の。阿彌陀佛迄質屋へとばし手ぐらまぐらに調のへ。今少に手づのへふつとした出來心後悔先へたゝきがね。只今の樣のせめ念佛にあふとも。出家の身にはあぬまいとあぬまい〳〵。こゝぬまいだとぞ語りける。遙の後に年の頃廿余りの女房。盜み取たる青麥と背に縛り付られて。耻のしげにぞ泣居たる義貞つく〴〵御覽じ。

彼が躰盗すべき者とも見へず。子細ぞ有らんまつすぐに申べしと有ければ。女些共騒がず。ハテ、子細と申て麥と盗みしより外の子細もなし。はや〳〵法にとこなひ給へと恐れもなげにぞ答へける。義貞猶もいぶかしく。子細といはずんば往還にさらし諸人に耻と知すべきぞとの給へば。女はわつと斗にて暫し涙にくれけるが。ヽ、是非もなや盗みとするも夫の耻。包まんと思ふ爲成に諸人に面とさらさんと。耻と招くの情なや然らば包まず申べし。わらはが夫は足利尊氏の相傳の侍成が。聊のと有て主親の勘當受。此國の土民となり忍びて暮すうき身にも。此度の合戰是屈竟の時節到來。れゆるしなく共戰場に馳加はり。分捕高名譽と顯し。主の不興父ごの勘當ゆるされんと。思ひ定めし我夫の心は矢丈にはやれ共。鎧一領有にころ手綱ゆりのけのつたり共。一町もとばぬ野飼の痩馬。住もわびしき藁屋の窓より。鯨波の聲矢さけびの音のすゐに聞もる其時は。齒ぎしみしての無念がり傍で見るさへ胸せのれ。已れやれ二世とのはした大事の男此まゝにては果させじと。樣ざまに思案し麥と盗んで兵粮の。びんよくば陣所に忍び寢入たる軍兵原が。太刀物具思ふまゝに盗み取我夫に打着せ。みづからも太刀脇ばさみ夫婦諸共軍して。名と後代に上べしと思ひしともいたづらに。このゝる縄目にあふとも夫の武運の拙なき故。仔細と云も此あらましとてもながらへ果ぬ身ぞ。憂物思ひさせんよりはや〳〵殺して給はれなふ。御慈悲成は人々と聲も惜まず。歎きしは曰も當られぬ風情なり。義貞もやゝ落涙有。ヲ、あつぱれ武士の妻にて有けるよ。命がけの盗して。夫の武勇と勵ます心感じても猶余り有。罪ともるし義貞が。着捨の鎧太刀ともそへて取すべし。夫〳〵との給へば御召替の錦の直垂。金作の一てし女が膝にぞ置れける。サテ歸つて物具きせ明日の合戰あは。義貞が陣に向つて打てのゝれ。敵ながらも見物せんはやとく〳〵との給ひて。いましめの縄と解せらる女は アツト頭とさげ。情有御大將有がたき御恩の程。何と報じ奉らん去ながら。我夫はまさしく尊氏公の御家人。すは合戰に及んとき今給はつたる鎧と着し。太刀と持て義貞公に向はるべきこの。用捨しては尊氏への不忠。是非なく一矢仕らば。恩と知ぬ弓取と。末代迄の笑ひ草御恩は却てあだとなる。只御慈悲にはみづからと盗一へんの科に落し。はや〳〵殺して給はれと。首さしのべて泣居たる。心の中こそすゞしけれ。義貞猶も感じ給ひヲ、其心と察してころ。わざと最前より夫が假名實名とも尋ず。互に知れず知ぬ相手。名乘て勝負と遂る時いづ

れに用捨の有べきぞ。さ程のとと汝等に教らるゝ義貞ならず。いらざる詮義に時遷れりはや〳〵歸れと太刀鎧。手づから取てたびければとし戴きわきばさみ。お情は是迄明日の合戰には。夫婦諸共心と合せ。恐れながら御運によつて御首と。給はるとも候べしゆゆるしあれ御免あれと。御前と罷立のもみ。ひきはのへさと武士の妹背の義理ぞ頼もしき。既に其夜も明行ば。勝にのつたる尊氏の軍勢雲霞のごとく。湊河より打てのゝる義貞も西の宮より取てかへし。生田の森と後にあて入亂れ責戰ふ。太刀のつば音ときの聲。いの成修羅のたうじやうも是には過じとおびたゞし。小山田太郎高家は心斗は春の花。身は埋木の力なき野飼の馬の繩手綱。ちぎれ且足もあらばてゐあまつさへ女房の。夕邊に出て歸らぬは心もとなき氣遣さ。足に任せてこゝのしこ所在と尋ね求塚。小松原より振返れば。いのに遙向ふの山々に中黒のはた二つ引りやう。巴の旗も輪違ひに東へなびき。西へなびき磯山風に翻飜して。馬煙り矢さけび天に響き地に滿て。新田足利の國爭ひ今と限りと見へたりける。さうら山しき殿原が合戰や。せめて古見足の一領もあれのし。取て投のけ何百万騎の中なり共。只一揉に驅破り兩陣の目と驚のせん物と。何といふても浪人の紙子頭巾に鋤一丁。思ふに甲斐のあらばこそ貧は諸道の妨と世のとわざも我が身のうへ。ヱ、無念口惜やと。こぶしと握り牙と嚙男泣にぞ泣居たる。のゝる所へ女房は危き命とまぬのれ。ふつてわいたる太刀鎧夫に見せて悦こばせんと。足早に歸りしがさゝこちの人爰にの。此なりは何ぞいの。さぞ待兼てゞ有ふと思ひ。いきせきして戻つた是わしじや女房じやが。なぜに物いはんせぬ氣合が悪いの高家殿と。抱きおこせば涙とおさへ。ヲ、氣合もぞふでよふはない。女房あの向ふの山々に。入ちがふ旗と見よ今ぞ合戰眞最中。あの軍中には主君尊氏公父前司殿もふはすらん。正しき主君老たる父が天下別目の晴軍と。命と惜まず戰ふと子の身として安閑と。見物して日と送る是が無念に有まいのと。いはせも果ずコレくく其泣事はもふいらぬ。是見さんせと太刀鎧投出せば。高家横手とちやうぢ打。鎧引よせつくゞ見て。矢留り金物押着桜。發傳高紐上卷付。太刀は烏首兵庫ぐさりゝ、是は大將の拂物。大抵では賣まじきが但損料でばしのつたのといへば。女房くつ〳〵と吹出しゝつがもない。日がな一日たま綿くつて錢廿取や取ぬもの。八百年の手間賃でも中々買るゝ物のいの。馬の草もなき故に夕邊義貞の領内の。青麥盜み苅たると番の者に搦られ。殺さるゝ筈成とさ

すが義貞は憐と知つた大將。夫の身の上聞屆。命と助け其上に此太刀具足。サア早ふ出立て手柄してござんせと。わたがみ取てきせんとす高家つきのけ。ム、誠に義貞は五常と守る名將物の憐としること。敵味方の隔なき人と聞。義貞に貰ふた鎧と着し。直に義貞に打てのゝらんと心よからぬ軍なれば。思ひ切たる高名も成べからず。エ、よしない情と受たりと。くやみ顔にぞ見へにける。エ、こなた共覺へぬ。義貞程の大將がさもしい返報受ふとて。何の情とのけられふ夫も。へこなたの名も問ず。用捨なく我とうてと詞に念と入給ふ。義貞の目の前此具足着て働き。わは能ば義貞としてやらふと思ふ氣はないの。エ、とくれた人やとせきければム、分別した合點有。一度着して見せずんば。其方とのたりなぞゝさみせられんは男の耻。サア小山田太郎高家が出陣と鎧取てみげのけ上帶高ひも小とぞりして。引ぐ〳〵太刀わきばさみ立あがれば。ヲ、わつぱれ武者振よい男わしも馬に草のふて。追付そこへと立歸れば。是討死は軍の習ひ。いきて歸れば仕合先今生の暇乞。必ず泣なコレ武士の妻に成のらは。ろこは合點死出の山路の一二ののけ。とくれはせないとわのれしは。はや修羅道の先陣と。後にぞ思ひしられける。傾く日蔭西の宮大手の合戰入亂れ。人馬四方に馳ちがひ喚

きさけぶ其聲は。山と崩すが如くにて官軍既に戰ひ破れ。堪へつべふは見へざりけり大將義貞只一騎。返し合〳〵十六度迄駈散し。御身ときつと見給へば。數の所の矢疵馬鞍に立し矢は。枯野の薄にとならず。エ、軍の勝負今日に限るべのらずと。追くる敵と切はらひ〳〵。求塚の小松原心靜のに打給ふ。高家其ぞと見るより大音上。大將軍と見奉る正面後と見せ給ふ。引返して勝負あれととつのくれば振返り。日本一の義貞に聲とのくるはこざのしと。鎧にのけてはつたと蹴散し。たゞよふ所とひらりと飛れり。片手とのべ一突つけばこがらしに。のゞせのたとるゝ如くにて横なげにぞうぞふす。義貞すのさず弦走りにのつのゝり。首とのゝんとし給ひしが鎧出立つく〳〵と御覽じ。ム、ロ天晴とのれはしれ者哉。義貞にやす〳〵と組しのれん力とは覺へず。何とて我と組しのぬ定て子細有べき。去ながら汝が主の尊氏と組伏たらんはしらず。汝ごときの侍と五十百首取ても。さのみ義貞が手柄本望共思はず。サア子細と語て名のれ〳〵との給へば。御諚とも覺へず。いのに大將なればとて。わざと敵に組しのるゝ者やゝべき。足利尊氏の家の子小山田前司高春が一子。小山田太郎高家不足の敵とおぼしめさば。只首打てすてさせ給へと兩手ともるめ

て働らのず。いや〳〵此物の具は夜前女に與へし。義貞が着捨の鎧扨はその夫よな。恩と報せん心ざしはらしゝやさしさよ。さりながら天下にくらぶる義貞が命。僅の鎧一領にて助のらんとてはとらせぬぞ。主親の勘當に付望有者とさく。目と驚のす高名して本望と達せよ。只今にても跳返し義貞と今一勝負。爲ばせよのしとの給へども小山田は涙にくれ。重々の御情冥加の程も恐ろしく。申上る詞もなし。いふに甲斐なき此高家がのせくび。義貞公の御手にのゝり申と。いなる先陣さきがけにも勝つて身に過たる譽。勘氣の父が聞ならば。さぞ悦び申べし。此上の御芳志に。はや首打て捨させ給へと。申切たる兩眼に涙。と。流すぞ道理なる。ヱ、義理ばつたるかのこやと。取て引立鹿打拂ひ。義貞に助けられしと人に語るな我も人には語らぬぞと。手負し馬ど引立て靜に打て過給ふ。武將の氣質備つて古今に語るもとはりあり。小山田は呆然と。義貞の仁心こゝろにしみて立たる所に。大森彦七盛長手の者五十騎斗。どつと驅寄大音上。赤地の錦の直垂中黑の鎧は。敵の大將義貞遠目にも見ちがへず。射取や〳〵と矢先と揃へよこざる雨と射のくる矢先。さしつたりと小太刀とぬいてはらり〳〵と切落す。されば共鎧のすきま〳〵矢ぶくめにかくめられ。今は是まで我義貞の命にのはり。其ひまにやす〳〵落し情の恩と報せんと。求塚に驅上り。遠のらん者は音にも聞近き者は目にも見よ。清和天皇の後胤新田左中將義貞。十せん天子に頼まれ參らせ屍と戰場の土に埋む。功ある大將の最期のていよつく見といて手本にせよと。たのひも切てとく所と大森主從れり重り。きりふせ〳〵とさへて首とぞのいたりける直垂切てとし包み官軍の惣大將。新田義貞と伊豫の國の住人。大森彦七盛長討取たりと名乘しは。いのめしうこそ聞へけれ此聲に驚き。馳散たる味方の勢大將と打せては。壹人もいきて詮なしと八方より引返す。義貞も取て返しゃ〳〵同士討する狼狽武者。誠の義貞是にありと切てのゝり給へば。イヤ義貞が二人あるものの。新銀古銀同じ通用是で堪忍仕ると。一散に逃て行味方の大勢追驅ると。大將とさへてしばら〳〵彼は聞もる傢人。愚痴愚蒙の狼狽者のゝる者の敵陣に。あるは味方の利運ぞと諸卒と示す謀。智謀は居ながら天に入波ともくゞる尼が崎。山崎過て名將の譽は。雲井の桂川。打ち越のけこへ渡りこへ。世に立こへてならびなき。我立初や都のふじ。西坂本にぞ入たまふ

第三

周の武王は木主と作つて殷の世と傾け。漢の高祖は義弟と尊んで秦の國と亡す。されば尊氏將軍天理と恐れ。後伏見の院宣と申給はり朝敵の名と免れ。忠戰の鋒先鋭くして。兵庫湊川の合戰に打勝 楠 正成に腹切せ。新田義貞と驅撤し馬鞍休め物具もぬぎて。紅とく花の都。東寺と假のやゐた城大將の。御所とぞ定らる猶も殘黨洛中と犯すともやと。口々の警固怠らず生殘る義貞一家。重て討手と向ふべし先々軍の疲とはらし。樂と諸人と共に樂む酒宴の興。此度の合戰に。分捕高名の帳面と開のせ。其〳〵に御賞美ある。仁木細川吉良石堂。南部桃井高上杉武田赤松畠山。澁川岩松一色荒川小笠原此人々と始として。とさまの大名小名御家人は言に及ず。雜兵薬武者に至る迄たち刀馬鎧。金銀時服の御褒美昨日今日の足輕も。知行の感狀給はつて首一つが一筆に。千石に成も有數にもあらぬ首とつて。御褒美と貪れ共僅銀子三枚甲。拾ふて着せてもあさらけき。名大將の賞罰とあとがぬ人ころなのりけれ。爰に大森彦七盛長腹卷に直垂うちのけ。もみ烏帽子引たて血まぶれの甲箙御前にさし出し。敵の大將 楠 討死の後。總大將新田義貞西の宮の軍破れ。味方の多勢に取卷れ求塚の上にのけ上り。腹きらんといたせしと。某箭ずくめゐして討伏首取てゆ。殘る軍兵落行所と播磨路迄追のけ申せし故。御帳にも付申さず只今實撿に供へ候と。蓋と取ば錦の直垂袖とちぎつて包みしは。大將軍の首のしるし伺公の諸武士横手とうち。扨は義貞と討たるこの今度の譽は盛長一人。弓矢の冥加に叶ひし侍。れ手拭〳〵あやゐのり者とぞうらやまる。尊氏卿しばらく思案し給ひ。錦の直垂と着し新田左中將義貞と名乘たると。夫ぞとしつて討つらめ其に虚言も有まじ。去ながら此尊氏も義貞も。同じ清和の後胤八幡殿の嫡孫。敵味方とはなつたれ共俱に一家の源氏の棟梁。殊ゐ天皇に賴まれ參らせ官軍の總大將。相隨ふ門葉に大舘大井田里見烏山。大島堀口脇屋のれき〳〵數としらず。譜代重恩の武士も多ゐるべし。義貞程の大將が討死せんに。我さきにと駈合せ冥途の供とて一人も討死せぬさへ不思議成に。殘る軍兵播磨路迄逃たるは心得がたし。一とせ楠がやけ首と以て欺き。義貞の智略に乘られ京童の笑草。にた〳〵敷首共とまさしげにもゐけたりと。落書と立られ六波羅の愚將共が。耻のきしと聞及ぶ。彼等は天性武略智謀備へたる英雄。引も聞るも理に當り生るにも死ぬるにも。勝負の損德と守る名將。いの成謀とやゐま

へつらん。卒爾にもてはやし義貞にてなくんば味方の耻辱は云に及ず。汝不覺人の名と取るべし。あたゝ如何思はるゝ評詑あれとぞ仰ける。大森つゝと出いや御評詑迄もなく。生ぎりの者に見せ御尋ひはゞ。實否早速しれ申にて候とこざのしげに言上す。尊氏大きに笑はせ給ひ。イヤ生捕に問なぞゝは名もなき者の首のと。命と捨て働き入生ぎらるゝ程の者なれば。よつく大將義貞に忠信深き侍よとはれて誠と言べきこの。若御邊連盡き敵に生ぎられ。味方の謀と聞ならば有の儘にいはんずな。變束なしとの給へば。盛長は詞なく赤面したる斗なり。大將重て我義貞と一家なれ共使者の通路斗にて。終に直に對面せず見知たる人あらば。申されよとの給へば諸大名立より〳〵。關東以來此度の合戰にも。遠目に見たる斗にて近付しとなければ。おぼろげのとは申されずと。更に實否は極らず。小山田前司高春末座よりのび出て。見ればおもざし顏のゝり若年の昔勘當せし。我子の小山田太郎高家に。似たりと見たる親子の緣六十の老眼にも。紛ふうたなく胸にしみはつと驚き居たりしが。さあらぬ体に心と沈め。新田殿の御顏は先年鷹狩の折柄。一兩度も見參らせ大あたに覺候と。近々と立より右へまはり左へ向。ためつすがめつ見れば見る程疑ひもなき我子の高家甫無三寶。勘當して十八年此世にながらへ有ならば。此度の合戰に大將の御目に及ぶ程の高名せよのし。夫と品に勘當もるし御前もとゝのへ老が世の。子孫の榮と見ん物と。頼し心の綱も切そゞろ涙のこぼるゝと。ハテ、老眼のゝすみさだのならずと目をとしのごふ其中にも。當家譜代の身と持て敵の大將義貞と。名乘て死せしは心得ず。申詞にさしわたり前後にくれたる斗なり。大森彦七つゝと出是々前司殿。生顏と死顏は相好の變る物。其了簡して大概似たらば似通申し上られよ。凡道具の目利でも。只一言で千貫の道具が似せ物に成とも有。粗忽いふて盛長が。高名と消まいぞと色とのへてぞ申ける。前司重て御前に向ひ。面體よく似たるとは存ずれ共。某が心にて決定しても申されず。所詮一條大路の獄門にあけ。諸人の噂とうのゞはゞ是非明白に顯はれ。義貞に極らば味方の勝利盛長が高名。もしさもなき首にてゐはゞ六十に余る前司めが。粗忽と申て面目なしと獄門の木の下にて。腹のき切て伏ならば耻は某にとゞまつて。盛長が不覺もなく味方の耻辱もゐまじ。此實否とたゞすと某に任せ下さるべしと。望み申せば尊氏卿然らば兎も角も計ふべし。去ながら都方は義貞ひいきの万民。詞も直には受がたのうらんとの給へば。さんゐ壽永

のむのし水曾殿北國合戰に。手塚の太郎光盛齋藤別當實盛が首と取しの共。名乘ねば名も
しらず見知人もなのりしと。樋口の二郎が朋友の好誼に語りし詞の色。染たるすみのびん
ひげと洗ひて夫とは存じて候。友達のよしみにさへ心とわのすは人性のならひ。殊に義貞
は情有大將よしみの者も多のるべし。北の方は勾當の內侍と申內裏上臈。のくと傳へ聞、
給はゞ忍ぶに余る涙の袖。諸人に紛れ給ひても思ひは外の色に出。其のくれ有べきの實盛
がひげと洗ひしは。夫は篠原池の水。是は情のそこぬなく誠と顯はす涙の水に。洗はせて
御覽候へと。申もあへず首と持御前と立けり。うたてやな是御覽せよ。今迄もるがず折て
のたげし此柳。風のさそへばこそ一葉も散なれたゞ〳〵心すぐなると。戀ころ我とくる。
くるはすれ。風狂じたる。秋のはの。荻のとゝづれ今の。〳〵とたのものりよ。君が玉
づさつばさにのけて。我手に渡せ渡せやわたせ八はしの。澤邊ににほふのきつばた花あや
め。にたりや似り新田と問ければなつのしやなふ。ヤア〳〵わらんべ共は何故に立さはぐぞ。何
新田左中將義貞と云大將軍に打負。敵に首と取れて獄門にのゝり給ふとや。わら誠しの
らずや。其中將と云人は。元より弓馬は家の藝。雲のうへ人に交りては。歌れんがの道に
も達し。鞠は曲鞠の品々迄くらのらず。又酒もりなどの折柄は。いで人々にらんぶ舞て見
せんとて。すいのん直垂取出し。ゑもんうつくしうきないて。へりぬり取て打のづき。手
柏子人にはやさせ。扇とつ取なるは瀧の水。たへずとうたりたへずとうたり落くる瀧の。
音羽の嵐に地主の櫻はちり〳〵。ヤ、淺ましやちるは櫻のふるは涙の誠にあれよ。あの獄門
こそ涙の種。めぐりに嚴しき鎗長刀劔の枝のさのしき中の。梢にしぼむ花ののはばせ。目
もふさがり色のはる共契りは變らじ。我ゑろ妻の勾當の內侍。何なふ內侍と召るゝのや。
いで參らふ。思ひ出せばはやむのし。人目忍ぶの袖打のざしあひそめし夜のむつごとも。
語りつくさぬ鐘のこゑ。けいろうの山にひゞさて森の小鳥八こゑの鳥。曉の明星が。西へ
ちろり東へちろり。ちろり〳〵とする時は。扇とつ取刀さいていなふよ。戻ろふよといふ
ては妻戸にたゝずみし。ゑにしなきりゝんな。君が心に秋風吹ばいなふ共。戻らふ共何共
ろなたの御はのらひと。いふてはこでしに。抱つきて。むすぶの神の中立は比翼連理も磯
枕。くちせぬ中と葛の葉の。怨は風のとがもない物。誰が手にのけてうつの山。つたのは
のづらみだれそめ。くるひ出たる。我身は。何とならの葉の。露よりうすき。ふなさけや

。雷は待のね夜中は歎き。曉起きて空見れば。兒の樣なけいせいが。むらさき盃手にすへて一つ參れ我殿。二つ參れ此殿三つめの肴には。白爪のちうりのらなしのら梅西王母が。その丶桃。百とせ千年の御命情なくも失なひし。そも修羅の敵は誰ろ。大森彦七盛長とや。夫の敵いざ討ん。持たる柳と劔と定め噴悲の焔はこがるゝ紅葉。いふに甲斐なき狂女なれ共夫の弓矢のはげしき嵐に。なれてもまれて。四方の櫻の四方へばつと。よりくる警固。さす手も引手も武士の物狂ひとて咎むるの。よし咎めても威しても歎きても口説てもひとりは歸らじ我夫たべ。夫たべなふ人々と。のつはとふして泣沈む。涙の袖も黑髪も亂れ心ぞ憐れなる。警固の下部棒振廻し。騷敷發狂め。そこ立退と追拂ふ前司とさへて。さなせそ〳〵言と有と立よりて。扨は義貞の北の方にてましますな。いのに狂氣し給ふ共年月なじみの夫婦の中。のほばせも忘れ給ひしの心と沈め能見給へ。義貞にては候まじ歎と止め歸り給へ。しやうだいなやと諫むれば。うたての人のいひごとや。伊勢の濱荻浪花の蘆。所にのはるは草の名よ。異國はしらず本朝に名もひとり身も獨り。又と二人はなき人成とさもなき首と何故に。墨くろ〳〵と高札に。新田義貞としるしたる其方こそ狂人よ。我は元より狂人のこばさぬ水のわはれとしらば。さのみ人目にさらさずともわの首とわらはにたべ。煙となしてなき跡の菩提と弔ひたふさふらふと。袖にすがりて歎このる丶。ヲ、御歎きといひ。御不審はさるとなれ共。此首は盛長が。討は討て候へ共義貞とは見へがたく。外に似たる者の有故さらして實否をたゞさん爲。あくの通と云所に東の壯に人立して。是も女の物狂ひ。ゆのきくもり黑髮も。おゞろにばつとふりのたげたる袖の葉の。亂れ心やくるふらん。あらはゞのりや恐れとしらぬ京わらんべ。忝なくも我殿御は。源氏の大將左中將義貞。參内の道そこのけとてそ。なつのしや我夫の。雲井と出しは卯月の空。秋よりさきにのならずと。夕の歎は重れど。こぬ夜つもりのうらめしや。獄門にたがさらしなの月日待しもいたづらごと。後世とふらひみづのらも死出三途とともなはん。御首たべなふ警固の人。む情われ人々と獄門の水に抱付。人目もわのず泣給ふ。以前の狂女走りより是。義貞殿の妻と云御身はそも何人ぞ。ヲ、聞も及び給ふらん勾當の內侍とはみづのらよ。イヤ實の勾當の內侍とは、わらはがと。御身は定て思ひ者か一夜妻。ありの情と忘れの跡迄暮ふはやさしけれ其。菩提ととふは本妻の役ふ首は我に下されと。としのくればと

しのけて。さいふ御身が一夜妻の遊女の。筋なきとな申されろ勾當の内侍とは。大内の女官御代にたつた一人の女。義貞殿の本妻我ならで誰あらん。物に狂ふも夫故本性はたがはぬぞ。誠の内侍ならば。義貞殿の參内の出立有樣覺しの。忘れしの。よもやしらじとの給へば。なふ忘れんとすれど忘られぬ其出立は紫ずろご。せんだんの板のふりの板。金銀にて中黑のしるしとうつてこがねざね。大だてあげのすね當てがね作りの太刀のたゐ。赤地の錦の御きせながわらはが取てきせければ。もつてうは帶ちやうどしめにつと笑ふて。あつはれ我ながらも弓取のな。今日の軍に譽と得て名と末代にとゞめんと。馬引よせゆらりとのつたるはなふ。大將軍にまがひなし近づく敵のときの聲。味方ふとゞろくせめつゞみみねのこがらし磯打波。よせくる勢とまくり切。大敵と見ていさむと。荒鷹が雉と見て。鳥屋とくゞるにとならず。雨やあられと飛くる矢さき。あがる矢にはのいくゞりさがる矢ぶは飛あがり。向ふてくる矢は小太刀ともつて。切ては落し受ては拂ひ。はらり〳〵と切拂ひしゆみの四方の四天王。まけいしもらが放つ矢と一度に切て大海に。拂ひ落すが如くにて面と向る敵もなし。のゝるも々敷武士の運盡弓も矢も折て。修羅の奴と成給ふ後世とふ者は我斗と。獄門に取付ばイヤ〳〵。其は軍の出立。大内のとと知ぬ身が。内侍とはいつはりと引のけてはわつと泣。とし退てはわつと泣雛の翁の狂ひ咲。花と爭ふ蝶々の露にしほるゝごとくなり。前司聲とのけゝ、はしたなし先しばらくと。二人と左右へ押分。首は一つ内侍は二人。是非一人は僞なり。是跡にきた上臈義貞と札はうつたれ共うたがはしきと有。心と沈めて能御覽ぜと。獄門と取とろし見するもわへなき生首と。なまめく膝にのきのせて一目見てさへなれし夜の。面影だにもまがはぬ物能々見ればその原や。有とも知ぬ死顏にぞつとこはさのゞ、恐ろしと。拂ひ退て身と震はし。いや〳〵是は人たがひ。目元口元義貞殿には似ても付ず。のねて我夫の給ひしは。軍は時の運いつ討死もはのられず。敵に向ふたびごとに帝より給はりし。蘭奢待の名香。内甲にたきしめん。鬢の髮に名香のほる首取たりと言人あらば。義貞が討死と思へとの御詞。軍の騷ぎに淺ましい下郎の首と取ちがへ。誠のお首は勿体なや草むらにうづもれしの。尋てたべ人々と歎き給へば以前の狂女泣出し。口惜やいのに見しりなきとても。下郎の首とは余りぞや我夫は身貧にて。名香はたのね共弓取の心の花は。梅櫻よりのんばしく仁義に命と捨し物。のばねに恥と與へ

るの情なやいとはしやと。首だきよせて伏轉び擘も。惜まず泣居たり。前司飛のゝり取て つきのけ。首の髻と掴んで涙とはら〳〵と流し。六十の老眼に見しも違はず。我子の小山田太郎高家にて有けるよ。ふとは連添女房なる。我こそ彼が父。足利尊氏卿には譜代相傳の御家人。小山田前司高春生年六十七歳。命ながければ恥多しとは我身の上に知れたり。十八年以前彼奴は其時十二歳。猪狩の御供せしに。年ふる猪の峰こすと誰の有。あの猪射留よとの御諚。太郎こざのしげに小弓に矢をはげ向ひしと。尊氏はつたと睨せ給ひ。小腕にて仕損せん罷しされとの給ひし。侍詞も終らぬに弓と矢大地へ投付しと。彌立腹まし〳〵誰に當つて投うち。年にも足で慮外者親前司はなきの。あれ引立よと御いのり。其より若の御不興なれば親も則勘當して。十八年の春秋は風の便も絶果し。首も性あらばよつく聞。世間の親の勘當は遊女博奕大酒のさた。其さへ親は子と思ふ兒心にも弓矢の道。主君に向て意地と立たる御憎しみ親の身では憎い半分。嬉しいが又半分の勘當ぞや。今度の軍に義貞方の名有兵。首取て來れのし君の御前は云に及ず。天下の武士にはめさせ。我も世上の親たる者にうらやまれん。今やくる〳〵と毎日の高名帳。夜はくつて翌日と待親に孝なく義も知ず。所領恩賞に耻とのへ歟に手とさげ膝とつき。義貞に降參し知行に命と捨しよな。迚も捨る命となせ尊氏に奉り。名の爲には捨ざりしぞ親は年よる子は犬死。小山田の名字のはまれ誰が末の世に殘すべき。ヱ、淺ましやと齒嚙となし。持たる首とのつぱと投どうゞ座して。泣けるが。思へば汝は義貞の郎等。我は尊氏の御家人親子ながらも敵味方。首成共一太刀と振上て打のくる。女房すがつてなふ悲しや。内侍樣もとめてたび給へ。親の勘當受し身は未來もやみに迷ふと聞。勘當御免なき上に親の手づうら子の首に。刃とあて給はゞ迷ひのうへの迷ひなり。最期の樣と聞分て。免しのお詞のけ給はゞ名僧智識の引導も其にはなどのまさらんと。口說立て〳〵歎けば。さすが親心。いふとあらばはや語れと。むせび入たる斗なり。女房猶も涙にくれいたはしや我夫の。今度の軍は高家が主親の勘氣ともるされ。昔にのべるは此時と軍兵にまじり。幾度この出給へ共浪人の貧しき身。鎧一領あらばこそすはだ武者の錆刀。拾ひ弓に拾ひ矢島につのふ野飼の馬。うて共あとれ共のはねば痩て足立ず。いの成猛き武士の三條小鍛治が劔にも。なふ貧苦の敵は防がれず。腹と切んとし給ふとわらは樣々力と付。兵粮まぐさの心ざし盜みのゝりし青麥の。畠は敵

の領内高手小手にしばられ。大將の前に引出し罪に沈むはづなりしに。敵ながら義貞は情有大將。身の上と聞屆け命たすのる其上に。召がへの錦の鎧太刀刀迄給はり。此恩有とて必ず我とのばふな。其故夫が名は問ぬと。仁義深き御詞かたり聞せし我夫の。心魂に染たるか御命にのはり。我源の義貞と名乘てあへなく討れ給ふ。たとへ千金万金とのべたる鎧太刀にもせよ。高家程の侍がうへに望んで死すればとて。鎧一領太刀一振に目がくれてそもや命が捨られふの。是ど誠の情の死とは夫のと。恩と忘れ義貞と討參らせ。尊氏公より大國と給はつて榮華と極むる果報より。義理と情に命と捨獄門にのゝるこそ武士たる者の果報なれおいとしや御最期迄。心にのゝるは父御の不興。御免有との一言の息とお顏に吹のけて。親子の緣と二世迄も。結んでしんせてたび給へと。すがりのきよせいだきよせきに入く泣ければ。内侍も扨は我夫の命の親ぞと諸共に。聲とそろへてのこちなき。鬱固の匹夫下部迄袖としぼらぬ者はなし。父の前司も愁歎の涙にのきくれねたりしが。ヱゝあつばれ我子やでのしたり。只殘多きは十二歳より一日安堵の思ひもなく。貧苦でしなせし可愛さよ。情にもせよ義理ふもせよ。義貞と助けし子の親は。主君尊氏へは不忠の者。奉公すべき理屈なし御前にて此首が。義貞にてなき時は獄門の木の下にて。腹切てふすべきとはちげんはなつて申せしはこの樣のため。尊氏の御手にのゝると思ひ我首てづのらのき落し。勘當は冥途にて直にあふてゆるすべし。内侍樣とのしづき情の恩と報せよや。三世の諸佛大悲のちから親子一所に導引給へ。是迄なりと刀と首に兩手とのけ。ゑい〳〵〳〵のぞ消にける。會者定離とはいひながらあふも今別れも今。是日前の哀別離苦愛と重ぬる涙の袖に。見の首とおしつゝむ内侍は夫の命の親。是も我爲身ぞと身に引そへてもろともに。誠有ける現世の道仁といひ義となづけ。忠孝深き法の海ともにぐせいの舟岡山。煙の末も一筋に亂れぬ。御代のとしへなる

第四

夜さ樣のねすがた窓のら見れば。花ならば利櫻。月ならば十三夜。さのりまだしき。ねやの内。さては野にさく百合の花。しよがゑ。少くはん〳〵とぞ謠ひける。ナイくやのまし

吉野都女楠

丸太めら。暮に及んで何事じや番所が目に見へぬの。うぬらがくる所でない。通れ〳〵としのつても晩んでも。さては。野に咲百合の花。しよんがゑ。扨々無禮者此所と知ぬの。坊門の宰相様の御下やしき。尊氏將軍と御内通。後醍醐の天皇と此所に押籠。近日隠岐の國へ流しもの。夜の目も寢ずの大事の番。宰相様も只今奥に御入。追付お歸りそこのいておれ〳〵ときめつくる。ヤ、このたい侍じや。是より厳い番所波にもらるゝこのぐり舟の中迄も。小歌は付たり仮寢のとぎによばんす。ねしめてのねごゝろは髪の有よりないのたが。びら〳〵せいでよいげな。番衆は猶用心すはと云時はや鐘まさり。私がつふりと打んすりやはやくはん〳〵とぞじやれのくる。奥より殿のお歸りと。よばゝれば番の者ばら〳〵とのしこまる。宰相もう〳〵と立出あたりを見廻し。あの裏の方は塀一重。犬のくぐつた道も有。いのにしても無用心。明る早々めぐりに蜘手ともはすべし。彌々番を怠るな夜中替りに定しのらは。氣のつまる間もなし番所は禁酒にして。萬に氣を付油斷すな追付尊氏より大國を給はり。此宰相も公家とやめ武家の大名と成時は。皆相應の知行とらすべし奉公お精出せ。又後程見廻んと上屋敷へぞ歸りける。番の者共のびとしてやれきつまりや是おびん。旦那がいなれたもう樂じや。謡とふと踊ろふと夜中迄はこつちのもの。てゝへ〳〵と招かれて。ゝ殿達は三人わしがおてきはどれじやゑ。氣が定まらぬと云ければ誰有ふ此はなヤ傳五平其はまんがち。今夜は身がとめぶろだ。イヤ身がせんだとせり合へば。是々傳五軍太せりあひは無用。此源藏に任せてとけ。寢る時はもみ圍でしぶいてこい先其迄は一盃あげてしよげるべい。ヤ酒賣の又六がもうくる時分と比丘尼一人に侍三人役目の番はよその町聲高々と荷ひうり。大名深草大納言。唐人分別ぬらりころりのうね平。やい大名とは白餅深草とは鶉餅。大納言は小豆餅唐人もろこし分別餡餅。ぬらりころりは鰻の蒲燒山樹味噌。兼平とは木付殿の御内に今井ずし。酒盛にのくれなき一騎當千の御肴磯打波のまくりのみ蜘手のくなは十文ぎりの。茶碗に一ぱい酒でも餅でもうまい物のせい揃。錢次第とぞ賣にける。各悦び又六きたの是見よこふした色遊び。酒も鮓も有たけはたけ買てやる。汝も飲で太こもて。ヤ、其は忝い商して酒飲で。其内で利を取はめでたい西が吹てきて丸太舟の港入。三人の御番こなたは加番に青のぼん様。のるたには太この二盃には太この一。私のらと引受てついとはし。丸太様へとさしければ各口をそろへ。其盃を三

人の中氣に入た男にさし給へ。其者が枕ならべる。閻取より是がまし。思ひざしになされと而々衣紋つくろひ。鬚のきなでゝならびける。いや〳〵其では氣がしれぬ。茶碗三つで而々盃わしと思ふ數程のんで。心中と見せさんせ茶碗の數の重るが。私しが今夜の男じや。ヤア面白い酒の賣るずいさうと。茶碗ならべて三舛樽すぐにお酌と立ければ。何れも合點まつこのせと初手一盃はつい〳〵のみ。二盃目ははやがのみにて。三盃のらが義理一へん。後には義理も瓢箪も。ふらり〳〵がたちまちに。ころり〳〵と息つきて前後も知ず臥にけり。是々寢入ぬさきに錢しませふ。是旦那衆はて手のわるい狸ねいり。酒代早ふともり起すヤよいはいの。たつた今寢入ばな今夜は歸つてわすでも取たがよいはいのと。いへば又六腹と立。ム、扨はわひじやの。ヤアそなたのら錢せふと。ねだれのゝる其間に堀の破れに月影の。白犬一疋尾とふつて箱の鮓とぬらひ付。くはへる所と又六どつこいと首玉とさへ。犬も人も此屎敷は食逃の大よせ。罷ならぬともぎはなす是々。いふても畜生執心がのはいひ。其わたひは私がやる中で一番大きなと。おなのまゝ取て魚斗りうつてたも。是は犬殿大盡がついた何もわきなひ。丹後鯛の一番卅八文合點の。合點〳〵竹の皮一枚たもとこのげに立より。懐中より一通の文くる〳〵捲魚中に入てこい〳〵〳〵と。投出せばひつ咥へ塀の破れに入にける。又六とつくと見すまし小聲に成て。是比丘尼殿ろなたは異國の范蠡とやらるるの。此所は坊門の宰相下屋敷。天皇樣と押籠置。定しそなたは新田殿よりの案内と見たちがふまい。某は出雲の國名和の又太郎長年と云者。御厚恩の綸旨と受近よるべき便。この樣の商人せめて一人荷擔人の有のし。奪出し奉らんと心とくだく所なり。御身の上有樣に聞まほしし。と云ければ。ナ、我等は小山田太郎高家と申者の妻。新田殿の情と受夫高家は討死し。みづからは尼となり勾當の内侍樣とひとつ住居の其中にも。天皇樣と奪新田殿の御本意と。と思へ共女わざ。せめての便に御力と。付參らする斗なりと語れば長年大きに悅び。是ぞ御運のひらくる時折しも番の者は喰ひ醉。此塀一重踏破りやすく〳〵奪ひ奉り。吉野の奥に皇居とすへ。根來法師熊野武者とのたらひ。吉野十八鄕と都と定むる物ならば。北國西國なびくとわんの内ぞとわん餅の。になひ棒ゆて塀一間ぞう〳〵〳〵とつきくづし。つゝといれば犬の聲〳〵一犬吠れば万犬に。番の者共目と覺し起わがれ共ひよろ〳〵〳〵。よろう〳〵とよろめきながら南無三塀と破つた。又六めの丸太め

の。一打にしてくれんと。扳つれ〳〵入けるは危のりける次第なり。既に夜半の番がはり引連て宰相。撿見の爲に來りしが。ナヤ番の者は一人もなく。塀押破りしは心得ず。敵の忍び入けるぞこみ入て討取と。喚いていらんとする所に又太郎大肌ぬぎ。棒ひつさげつゝと出。我等は酒賣の又六と申者。誰共知ず十人斗我等が酒酢飲喰ひ。番衆にも振まふてまんまと抱込。錢も拂はず塀を破つて入候。我等が爲にゝ喰逃の敵。奥に氣遣なさるるな是へ追出し申べし。酒臭者と相闘に討取給へと云ければ。ヲ、出うした〳〵急いで是へ追出せ。承はるとつゝと入無二無三に追立る。三人の酔ざめ共逃出ればろりや討取と取廻す。イヤ我等は御内の傳五平。傳五平でも酒くさいはしれ者なりとはたときる。我等も御家來源藏。やれ〳〵彼奴も酒くさい。拙者は軍太こいつは取分酒くさい。一人ものがすなと片端切て捨にけり。又太郎とんで出お手拍〳〵裏門は大うた仕廻。表門の酒くさゝ鼻がもげていにまする。皆々表へ御廻りヲ、心得た。隨分はなときのせよと表門へとのけ出す。其隙に高家が女房天皇の御手と引。走り出ればあまたの犬跡先と取卷て。吠のゝれば又太郎うちもらされの今井の四郎。手なみと見よと鮒も餅も投出し。虎の尾と踏毒蛇の口。犬の背とお

どりこへ大和路さしてぞ

天皇うちゞの御ゆき

世は末世に及ぶとても。日月は地に落ぬ。ならひとこそ思ひしに。我等いのなれば。王位と出てゐく斗。人臣にだにまじはらで。雲井の空とも迷ひきて。行衛いづくと白露は。草葉の上にときもせで。袂にさむさ秋の霜きく月も末つゐた。こきうと忍び出給ひ。あやしのしづの神もうでに。やつせど馴ぬすげの笠。雨とふくめる。こそんのき。夕邊と送る遠寺の鐘。憐と催す時しもあれ御いたはしや先帝は。りやうゐんの昔の御遊。くはけんのうしやの外と出させ給はぬも。いつしか馴ぬ旅はゞき千歳の。坂と詠せしも。耳にはふれて手にふれぬ。うきふししげき竹の杖。長年一人御供にて知ぬ。野山とこゝのしこ。たゞらせ給ふ御有樣。よろの見る目も恐れ有。こゝはいづくと里人に。いざ鳥羽繩手秋の山。岩にくだくる瀧川の。ぞう〳〵〳〵ぞつとよせくる追手の聲の。それのあらぬのいやまてしばし。あれは野面にたれまねくのゞしの影に落人の。鳥よりさきに驚きてともにむら立

驚の森。急とすれど。玉ぼこのならはぬ道のけはしさに御足もつけ損じ。御わらんづに流る丶血は草葉に染ていさら川。紅葉しがらむごとくなり。憐げに昨日迄。玉櫻錦殿の床に座し。月に戯れ色香にろみ花やのなりし玉躰の今日は岩間の苔むしろ。かたしく袖に御涙。せきあへさせ給はねば。さしもに猛き長年も。涙は胸にせき戸のゐん。こ丶は名高き山崎の。麓にみだす狭莎薄ふみわけ。なくや狐川東の空と眺むれば。あれ〳〵宇治のこのはぎりたへ〳〵の。せゞの淺瀬にわらんべの小手さしつる丶聲々に。故郷戀しや我ふるさとの。芝のいほりもなつのしや。庵もしばの。柴の庵もなつのしや。戀しものしと聞のらに。實に九重もはる〳〵と跡の名殘に男山。さのもくとも有こしに。今のうきめとみつのうち。西にのすみて淡路がた。須磨のせきもり。よびおこし。通ふ千鳥のちり〳〵〳〵と。よせくる〳〵。波もよせくるふもこのぢ。取梶ひやうしろへてさ。面白や〳〵さつさ。堺の裏遠く。帆と十分にあげた所が。面白いよの。何にたとへん五手舟。臨風さむく吹通ふ。このさも袂もひら〳〵〳〵。ひらの若江も過行ば。日影もさがるふぢゐ寺。はや告渡る鐘の聲てん。てん剛山もはるこの成。あれ御覽候へこのすみて見ゆる高嶺こそ志貴のびしやもんにて渡らせ給へと奏聞すれば。主上御手を合せ禮拜有。佛法おうごの本地の月すいしやくわくはうのこのげ清く。再び朝廷あきらこのに四海を照させ給へやと。丹精無二の御祈神慮もあんにはこのられて。たゞたのめ。年ふる松の。壽を御代にもづりて高やすや。其にはあらで是も又興津白波立田ごへよはにや君が一しぐれ。雲行空とこのげのと濡て。たゝずみ給ひけり取傳へたる。梓弓光陰矢のごとく楠正成この百ケ日。立や其名も忘れがたみの一子帶刀十一才。父が最期の無念さの胸に止まり骨にしみ。幼心に只一騎とふらひ軍思ひ立。鎧の袖に小櫻の花と手向の法の駒。曉深き星の影ともにこのゞやく銀ぶくりんの。くらの山がた山道の小石まじりの小笹原。ろよ吹風にくりこのけて取たる手綱こむらさき。藤井寺を弓手になし。右手へさら〳〵しと〳〵〳〵。こつし〳〵と歩ませて神の昔も念力の。爾現は今もあら人神。天神の森にぞ著にける。あら不思議やうしろのこたに女の聲。待よ〳〵と呼びこのけたり。何者やらんとふりこのへれば。きぬ引このらげこし刀。長刀こいこみ追のくるは。母上なり南無三寶。我と止めん爲なりと一鞭くれてこのけさする。息とばこのりに走り付鞍のしは手とむずと取。留ても引ても駟馬の二三十間引ずられ。やれ物がついたこの帶刀母

にもしらせずいづくへ行ぞ正行。母は息切しぬるとも構はぬこの悴めと。さけび給へば正行馬よりとんでとり。土に手とつき頭とさげ。父の忌のおきゝへばとふらひ軍仕り。尊氏と打果さんと思ひ立ゝ。御暇申さぬ段眞平御免下されとさしうつふいてぞ居たりける。母はとのふも涙にくれ。ヱ、如何とさなければとて。十に余ればとなやくなどさほどにも辨へなき。栴檀は嫩よりのんばしといふたとへも有。正成の子ならずや日本半分切取たる尊氏に。ふと一騎のけ向ひ一太刀合する迄もなく。多勢が中に取卷れ當座に討ればまだしもよ。生捕となつて面縛せられ耻辱の上に命と失ひ。いつの世にこの天皇樣と御世に立。父亡魂の本意とゞとぐるぞや。親の敵討んとて。のろ〳〵しく身と捨るは薬侍の上のと。父ごせの櫻井より汝とのへし給ひし時。老先迄の敎訓と母にも語り聞せしが。百日立やたゝずにて其諫と忘れしの。一族のたらひ軍兵揃へ。菊水の旗眞先にとし立。古今無雙の名將とよばれたる足利尊氏に。一あぐみあぐませんとは思はずして。一騎武者の働きにいこの成手柄したればとて。其名とあぐるばのりにて。天下の爲には益もなし。幼なく共楠正成が子六十余州とおも荷に持。大事の身とは思はぬのうらめしや情なや。サア歸れはやこのへれ。重ねて阿母は口ではいはぬつめ〳〵するぞ覺てゐや。是に付ても正成殿。今三年世になながらへ。ふことが十四十五にならば。のくうきせわもせまい物はうなの浮世や淺ましやと。諫め口說て泣給へばさしもふ勇む正行も。母の膝に抱き付聲も惜まず泣き居たる。親子の歎きぞ憐れなる。のゝる所に又太郎長年。母の歎になる父の顏と今見る心ちして天皇とおひ參らせ。森と目にのけ來りしがヤア心得ぬ。夜はまだ深きに幼き身に物の具のため女も長刀横たへしは。ムヽ例の山立よな。幸ひ〳〵彼奴と威して。夜道の案内させんと思ひ。こりやく〳〵山賊。熊野詣の同道に病人有て迷惑なり。夜明迄看病すべき所や有。送つてくれば急度禮とせんといへば。母聞もあへずいや〳〵我等山賊にてはなし。熊野道者の御病人とは殊勝にもおいとしゝ。我宿所は三里斗折ふし是に馬も有。召れて御入候へのしゝ。いや心ざしは嬉しいが人と忍ぶ我々。其中に夜明ては氣の毒。三里行ば隱れもなき楠ゐ緣有故。のたゞ〳〵と賴む迄もなしと行過れば是申。楠に緣有との給ふはどなたぞ。是こそ正成が妻や子にて候へ。扨はろふの我ころ隱岐の國名和又太郎長年と申者。おひ奉りしは丞なくも後醍醐天皇と。いふより親子ははつと斗しさつて額と地に付れば。君もでいどに

ふりさせ給ひ汝は帯刀正行汝は此。いづれも正成がのたみのや。妻子と御覧有につけ父が忠節とこそ思召出せとて。正行が髪のきなで丶。龍眼に御涙とうるめ給ふぞ有がたき。扨坊門の宰相のへり忠にて君とらはれと成賜ふと。小山田が妻と心と合せ奪ひ奉りし有様くはしく語り。碓氏方の追手の軍兵千騎斗。あれあの松明と急なり先御邊の館迄。急ぎ御幸なし申さんと云ければ。正行頭を振て。いや〳〵我等が館へ君を入奉り。追手の勢を引受させもきらぬ堀一重。溝同前の埋れ堀一日も堪へず責落され。敵に分量を見さがされ後日の合戦成がたし。此所につゝさゝへ追手の大勢打散し。出合頭の初軍に敵に一しほ氣を付て。驅惱ます程ならば重ての軍に二の足ふまんは必定。是非此所に喰留て一合戦とぞ申ける。母上聞んでヤてしやく者。たつた今意見した其舌も引ぬに。御前共憚らぬ利發だてなそれなんぞ。兄と云ても大じない長年殿。武勇と云年のさゝとにならひ給ふべきの。假初ながら大事の所あなたの下知に任せてねやと。ねめ付給へば又太郎年に足ぬ正行殿此所にて戦はんとは。勇有て頼しゝ去ながら。味方は貴殿と某只二人。追手の勢は一千余騎。死物狂ひはそは知ず勝べき道理更になしと。いはせも果ず、さなの給ひそ。無勢なりとて

欠

MISSING

し上。ゑいやつとゐでのふのみの泥水へ眞倒樣にぞ打こんだゐ。殘る軍兵恐れとなし四方へばつと散亂し近付敵こそなかりけれ。軍の手合のぞ出よしと勝どきの聲太鼓の聲。秘におぐらの千代万世と君と馬に怨し奉る。長年は項羽が勇。正行は孫子が智母が教は猛母が仁。是大將の智仁勇。合せて三つのみよしのやよしのゝ。内裏に御幸なる

第五

神風やみもすろ川の流れたへせぬ神國のしるし。後醍醐の天皇楠正行が守護によつて。吉野山に皇居有新田義貞馳參じ。都作りと聞へゑのば北の方勾當の内侍。千草の頭の中將洞院左衛門督心と合せ。三種の神寶内裡に殘り給ひしと盜出し奉り。神爾寶劍は内侍の身に付參らせ。小山田が妻御供すれば内侍所のゑるしの御箱。頭の中將左衛門督兩人荷ひ奉り。人目忍べば是も又憂とば何とうば玉の。夜道に同じ山ゐげや三輪の里にぞ着給ふ。鳥居の前成みたらしの水舟石に御箱とすへ。内侍は寶劍と神木の杉にゐけ。しばしやすらひ給ふ所に覆面したるおのこ。同じ出立十人斗道端につくばい。我々は近邊の土民共。

今度天皇樣吉野山にいらせられ。新田殿楠殿内裏と吉野に御造營なさるるに付。天照太神より傳はりたる内侍所樣と申御寶と。只今吉野へ御供遊ばす由。お公家樣のお身にて御太儀千万。まだ是より廿四五里中々お足つゞくまじ。賤き下々の身ながらも日本の地にすむ冥加の爲。其御箱と吉野迄のたにのせ申たし。息とのけるも恐れに存。皆々覆面致してりと取身と清め候。仰付られうしと思ひ入てぞ申ける。兩人聞給ひ扨々奇特の心ざし。是こそ内侍所しるしの御箱とて。天照太神の御たましひ御うげのうつりし御鏡。汝等がうたにのゝらせ給ふとよくも冥加にのなひたる。果報の者共有がたく存じ。擔ひ迄り奉れとの給ふ所へ。六尺ゆたのの大男是も覆面目斗出し。我等も當所の百姓冥加のため寶の御箱。吉野迄のき申たし。鼻息のくるも恐れに存覆面もいたしたり。御もるし下されと望めば兩人。ヲ、望みの者は幾人にても其身の祈禱。のき奉れと有ければ。ヘヲ有がたし。是そこなゝ樂さきがたでも後がたでも。いづれもよつて片はなされ。片はなは我等一人吉野迄同道。さきへ着て覆面取近付になるべし。道中万事申合せふ。サアこいといひければ各ひそ〳〵さゝやひて。いや其方が相方に我々は成まい。こつちの組へわたすのさなくば其方一人かいの樣共すき次第しらぬ者どし交るとは。此方はいやじや〳〵といひはなす。やあら珍しい。知ぬ者どし相方いやとは錢ととる出のごじやと思ふの。冥加の爲身の祈禱願ふは誰も同じと。どふも我等一分立ぬ。嫌ふには樣子が有ふ其と聞ふと理屈づめ。ヲ、小むづかしい何の樣子。見た所お手前は人間はづれのせい高嶋。肩が合ぬによつてのとどふでもならぬといひければ。ム、聞へた。肩が合ずば舁くまひふ供すれば同じと。皆よつてのき奉れと。ひつそふて我等はお供と身拵すると見て。いや〳〵所詮此方搆はぬ。供なりと舁なりと。已がざんまい皆こい〳〵と立のへるヤァやらぬ〳〵と道中に。大手とひろげふんばたのう。拙者と同道いやがるは而こそ見へね。大のた夫としつたな。尤々御所柿と澁柿とは皮むのいでも知る物。是見よ和田の新發意源秀と云御所柿と。覆面と取て捨毘沙門立にすつく立。ヤナ うぬは坊門の宰相柿。可愛や生れはよけれ共。持なしわるさに澁柿に劣つたな。公家ならば公家の樣に柿の本の流れとくみ。腰折歌でもよまずして。身にも熟せぬ武家じはり終に刃にさし通され。串柿とならん笑止さよとのんち〳〵とぞ笑ひける。宰相覆面取てすて。口惜や。勾當の内侍と大森彦七盛長に授けんと。契約せしとおのれに邪魔と入

られ。天皇と押籠尊氏より恩賞と受けんとすれば。あの尼めに奪はれ今又三種の神器と称ひ。尊氏公へ奉らんと欲する所。又妨ぐる推参者是程迄してみしと。本意と遂でとくべきの。下り坂の楠新田に組せんより運に乗たる。尊氏公に順がへ取次せんと云ければ。源秀大口あいてのらゞ〳〵と笑ひ。ヤイ尊氏は名大將。うぬらが様成る不忠の臣あたゝのな用ひられんや。天子に向つて弓引朝敵の名と恐れ。後伏見院第二の宮量仁親王と御位に立。吉野の内裏は後醍醐の天皇。京の内裏は新帝とあがめ義貞共和睦し。一家のまじわり舊の如く有度願。現惠法印と以奏聞ある。内奏の爲只今某吉野殿へ。參る折のら出合しは。うぬらが因果の木まぶり梢に殘つて烏の餌食とならんより。じゆくし首もすり落し踏つぶしてくれんと。飛でのゝれば下人共一度にはらりと取まはし。ナヲ奇怪なる雑言。とのれこそ赤面の熟柿坊主。踏つぶしてのけんと左手右手より取つけば。ムヽ此源秀と熟柿とな。熟柿にたゝの目白共。捻り殺して見せふのと引よせて片端より。首筋つかんで一しめしめてはのつはる。投。しめては投付。投付〳〵宰相に飛でのゝれば叶はじと山とさして逃て行く。源秀あまさじいつ迄の。身は逃るべき三輪の山ひばらとわけて追のくる。二人の女中公家達も何

との起りしぞ所は三輪の御神前。是は神代の御寶守りめもつき給ふのや。神力とそへ給へとわはて給ふぞ道理なる。のゝる所に大森彦七盛長。手勢ひきぐしどつとのけよせ。年頃心と盡したる内侍はあれよ。先なま公家ばらひつくゝれ。承るとひつふせ〳〵二人に縄とぞのけたりける。扨其櫃は心得ず何の有開けて見よと。いふより早く郎等共御箱にすがれば。兩人涙と流し聲とあげ。やれ情なやもつたいなや。其こそ忝くも我國の御寶内侍所。十善の御身にさへ拜み給ふことのなはず。不淨無禮の手とふれんとは忽ち喉くらんで。立ずくみに死なん淺ましや。情なやそこ立退と泣給へど。扨とおのしい神より強い軍神の。眞先のける兵に何の罰といふまゝに。のらげの布と切はぐき蓋ととれば恐ろしや。御箱の内鳴動していなびのり。天地に輝き神鏡朝日の登るがごとく。虚空に。あがらせ給ひける。近づいたる雑兵共怨悶絶血と吐て。のつけにろつて死てげり。無道の盛長ちつとも恐れず。よし〳〵さはらぬ神にたゝりなし。心とのけし女と蒐て歸る斗に。罰もたゝりも有べきのと走りよつて内侍と。ひつ立んとする所に。杉にのけたる寶劍のさやと離て刃の光り。天に輝き地になり渡り盛長が頭の上。ひらめきのゝり廻し〳〵。劍のはのせ神風の

迎るゝと追て千早ふる。いがさもこへてにげて行吉野の勅使。北畠の准后親房卿。新田義貞楠正行三種の三祇。御迎に來り給ひしが。三輪山の震動何事ぞと。急ぎ驅付こはろも如何ゐと驚き騒ぎ。兩人の繩と解給へば内侍は夢のこゝちにて。小山田が妻の情にてあひ見る今の嬉しさと。盛長宰相が悪逆くはしく語り嬉し泣ころ道理なれ。足利尊氏三社の神の靈夢蒙り吉野殿へ參らんと此所に行のゝり。驚き給へば新田楠すは大將と大將との。相手づくぞと身構へして既に危く見へし所に。和田の新發意宰相が首ひつさげ、是々粗忽せまいと。眞中へのけ入。先悪人一人は亡しと。首投出し義貞に向ひ。尊氏卿朝敵のとがとひるがへし申爲。量仁親王と御位に立京の内裏とわがめ。後醍醐の天皇と吉野の内裏とうやまひ。新田足利和睦して帝と守護せしむべきとの願ひ。現恵法印の取次我等其お使と。申詞の中より白雲たな引異香くんじ。杉の梢にのゝりしは不思議なりける次第なり。兩寶量子の御相好。たへなる御聲あざやかに。天ゐ二つの日なし地に二人の王なし。量仁親王に新帝の位と授け。後醍醐の天皇は院の御所とあとぎ。帝都は尊氏是とのため。吉野の都は義貞守護し奉れとの神勅なり。我國の三つの寶のあらんかぎりは。國とみ民も豊にて敵する者の有べきこの。寶劔の威德疑ふとなのれとの給ふ所に。有難くも寶劔は盛長が頸とさし貫ぬきてくうにひらめき歸らせ給ひ。元のさやに納りしは有がたのうりける次第なり。見よ〳〵悪魔がふぶくの寶劔は勇神璽は智。我内侍所は仁の鏡。智仁勇の三寶も佛法僧と王法の。民安全に守るべしと御詫宣のうちよりも。御のたちは鏡と現じ内侍の袖にうつらせ給ふ。天下一統源氏一統太平國に太平の。君が威光は万々歳治る。御代こそ久しけれ

同　廿三年八　月廿七日印　刷
同　廿三年八　月廿八日出　版

（定價金七錢）

飜刻兼發行者　早矢仕民治
神田區宮本町五番地

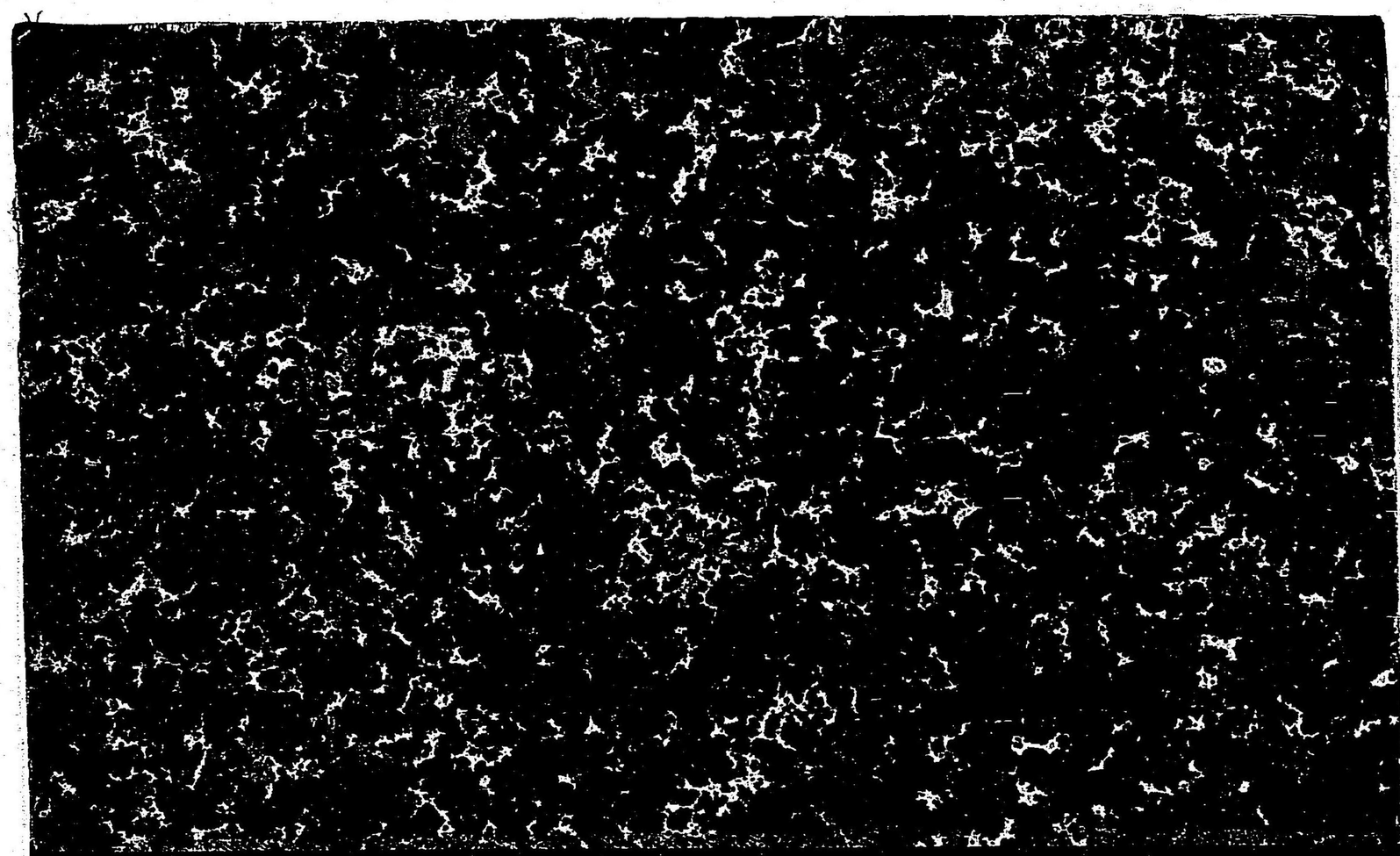
印刷者　松本秋齋
本郷區湯島壹丁目十三番地

發兌元　武藏屋叢書閣
神田區宮本町五番地

賣捌書肆
日本橋區通三丁目　丸善書店
神田區南神保町　松江堂
神田區表神保町　横濱辨天通四丁目丸善書店
中西屋芝南佐久間町　栗ばら
日本橋區通一丁目　大坂府北久寶寺町丸善書店
本郷區元富士町　大倉書店　上田屋支店　大黑屋書舗
盛春堂　京都
武藏屋　神田表神保町　嚴々堂
神田錦町一丁目　京橋彌左衛門　大坂備後町四丁目　博聞分社
神田淡集館內　黑雲堂

故近松門左衛門翁著集既刊書目

一出世景清　貞享三年二月初興行　二月十三日出板
一天智天皇　元錄二年三月初興行　五月十三日板
一十二段　元錄三年三月初興行　六月十三日板
一百日曾我　元錄十年十月初興行　五月十三日板
一心中重井筒　寶永元年四月初興行　再版近刊
一傾城反魂香　寶永二年八月初興行
一戀八卦拄曆　寶永三年九月初興行　三月十三日再板
一吉野都女楠　正德元年九月初興行　九月十三日出板
一堀山姥　正德二年七月初興行　再版近刊
一日本振袖始　享保三年二月初興行　八月十三日再板
一本朝三國誌　享保四年二月初興行　五月十三日再板
一關八州繫馬　享保九年正月初興行　四月十三日再板

各壹冊讀切　一冊定價七錢　一冊郵稅二錢

19
205